

『クレヴの奥方』における自由間接話法

森本信子*

はじめに

構造主義と物語論が文学研究を覆い尽くしていた1970年代から、文学は内容と形式の関連の中で語られることが多くなった。その流れの中で、話法の転換が注目されるようになるのは必然であり、特に日本語の場合、欧米の文学作品を日本語に翻訳する際に自由間接話法の処理が大きな問題となったのである¹。90年代以降は日本文学におけるこの種の研究論文も増えており、最近では日本語と中国語における自由間接話法の比較も行われている²。

自由間接話法が注目された契機のひとつは、ジェラルド・ジュネットが『物語のディスクール』の中で自由間接話法を間接話法や独白とともに詳しく論じたことだ³。この中でジュネットはフランスの文法家、マルグリット・リップスに言及しているが、実はマルグリット・リップスは、この分野の研究の先駆者ではない。彼女の論文は、その多くを師、シャルル・バイイに負っているものであり、シャルル・バイイこそ、自由間接話法という用語を1912年に初めて論文で扱った人物である⁴。

自由間接話法は、17世紀以前ではラ・フォンテーヌの寓話に豊富に用いられている以外ほとんど見ることはできないとされる⁵が、文法的形態としては16世紀にその原型が確立していたと言う研究者もいる⁶。また、筆者の考えでは、17世紀に自由間接話法を使ったのはラ・フォンテーヌのみである、と言う通説は誤りである。間接話法と直接話法の支配する小説として取り上げられることの多い、フランス心理分析小説の祖、『クレヴの奥方』の中には、いくつかの自由間接話法が見られるのである。小説の黎明期に誕生した『クレヴの奥方』の中で、自由間接話法がどのように使われているのか検討するのが本論の目的である。

第1章 フランス語における三種類の話法 — 直接話法、間接話法、自由間接話法

一般の文法書では、直接話法の間接話法への転換に多くの説明がなされるものの、自由間接話法についての言及はほとんどない。中・上級者向けの文法書の草分け、『フランス文法事典』の中で朝倉はStyle indirect libre（自由間接話法）について、「Ballyの用語。Discours indirect libre 或いは discours semi-direct (Legrand, 226)ともいう。直接話法 (discours direct) と間接話法 (discours indirect) の中間的性質を持つ話法。作中人物の言葉や考えを表すのに、間接話法に必要な接続詞（多く que）を必ず略し、多くは導入動詞 (dire, croire, penser, etc.) をも略して独立節の形を与え、間接話法と同じ人称・法・時制を用いたもの。（中略）疑問文が自由間接文体に用いられるときは、時制が平叙文と同じ変化を受けるほかは、直接話法と同じ。」と定義している⁷。バイイの第2の論文に挙げられた例文でこの3種類の話法の文法的特徴を見てみよう⁸。

- Style direct a) Pierre déclara catégoriquement : Paul *est* coupable, il *expiera* sa faute.
 b) Pierre s'arrêta, se demandant : *Entrerai-je* ou *retournerai-je* sur mes pas ?
 c) Je m'arrêtais, me demandant : *Entrerai-je* ou *retournerai-je* sur mes pas ?
- Style indirect a') Pierre déclara catégoriquement que Paul était coupable, qu'il *expierait* sa faute.
 b') Pierre s'arrêta, se demandant s'il entrerait ou s'il retournerait sur ses pas.

* 薬学部 第4英語教室

c') Je m'arrêtai me demandant si j'*entrerais*⁹.

Style indirect libre a") La déclaration de Pierre fut catégorique : Paul *était* coupable, il *expierait* sa faute.

b") Pierre s'arrêta : *Entrerait-il* ou *retournerait-il* sur ses pas ?

c") Je m'arrêtai : *Entrerais-je* ou *retournerais-je* sur mes pas ?

(斜体, 下線, 太字は筆者による。以下同様。)

Style direct (直接話法) a, b, c の文章では, 発話されたことばや思考内容が, そのままの形で伝達されている。Style indirect (間接話法) a', b', c' では, 文法の規則にしたがって被伝達文の前に que, si を補い (下線部), 被伝達文の動詞は時制の一致の原則により, 現在形は半過去へ, 未来形は条件法現在へ変換され (斜体部), 特に b→b' では je→il, mes→ses という人称変化も行われている (太字部分)。Style indirect libre (自由間接話法) a'', b'', c'' では, すべての文章において被伝達文の語順は直接話法と同じである一方, 時制の変化, 人称の変化については間接話法と同じである。

以上のような文法的特徴は, 小説においてはどのような効果を発揮するのだろうか。まず注目すべきは時制である。半過去や条件法現在という時制は, 間接話法の被伝達文においては, 過去における現在あるいは未来を表している。しかし, 自由間接話法では, 導入動詞が省略されるため, 半過去や条件法現在を時制の一致と取るか, 語り手による過去への回想と取るか, 文法的にはどちらも可能である。上記の例が小説の一部であると考えた場合, b'' の疑問文がピエールの内省を表す自由間接話法なのか, 語り手自身の疑問を表す地の文なのかを判別する決め手は, 文脈しかない¹⁰。

実はこの曖昧さこそが自由間接話法の文体効果を生むのである。この点についてジュネットは「作中人物が語り手の声によって話す」(ジュネット, p.203) と表現し, ロッジは「語り手はその技法により, 小説からすっかり姿を消さずに, 一人の作中人物の思考や感情に彩られた叙述をわれわれに伝える¹¹」と言う。間接話法の場合は, 報告者の支配性が強く, 語り手が伝達する内容に自分流の要約や省略といった加工を加えることが可能であるために, 地の文との連続性が維持される。自由間接話法は, 間接話法と多くの共通点を持つことで語り手の優位性を壊さずに, なおかつ作中人物の声も暗示しようとする方法なのである¹²。

以上3種類の話法が小説の中で用いられる場合に一番よく見られるのが, 間接話法から自由間接話法へ, という流れである。その他, 直接話法から自由間接話法へ, またはその逆で, 自由間接話法から直接話法へ, さらに, 自由間接話法と直接話法を行ったり来たりするもの, など様々な形態を取る(《Figures de pensée et formes linguistiques》, p.413-p.414)。地の文, 間接話法, 直接話法の間に自由間接話法を入れることで, 語り手の声にいつの間にか作中人物の声が重なるかと思うと, 作中人物の声, あるいは語り手の声だけが響いてくる, という単音, 和音の交錯する音楽的效果, または微妙な色彩的变化の味わいが可能になるのである。

第2章 『クレーヴの奥方』における自由間接話法

ジャン・ファブルは『クレーヴの奥方』において自由間接話法は「頻繁に使われている」と書いている¹³が, クロデット・デレ・サルレは「4箇所のみ」としている¹⁴。ロジェ・フランシオンは「直接話法とナレーションの間で, 間接話法は『クレーヴの奥方』の重要な位置を占めている」「間接話法はラファイエット夫人の芸術の最も意義深い形式として現れる」と書き, 「自由間接話法という用語は, 厳密な意味では, いくつかの例外を除いて, ラファイエット夫人の小説には使えない」として, ファブルの説に真っ向から反論し, デレ・サルレの挙げた4つの自由間接話法のうち2つは疑わしいが, 残り2つについては「直接話法による独白へのつなぎの役割を果たしている」と指摘し, 部分的に同意している¹⁵。そこで, まず, フランシオンも認めた直接話法へのつなぎとしての自由間接話法の部分を

検討し(1)、次に疑わしいとされた2箇所を(2)、さらに、筆者が自由間接話法と捉えることを主張したい4箇所を取り上げる(3)。

(1) 自由間接話法から直接話法へ移行する場合

1. Elle s'enferma seule dans son cabinet. De tous ses maux, celui qui se présentait à elle avec le plus de violence, était d'avoir sujet de se plaindre de M. de Nemours et de ne trouver aucun moyen de le justifier. ①Elle ne pouvait douter qu'il n'eût conté cette aventure au vidame de Chartres ; il l'avait avoué, et elle ne pouvait douter aussi, par la manière dont il avait parlé, qu'il ne sût que l'aventure la regardait. ②Comment excuser une si grande imprudence, et qu'était devenue l'extrême discrétion de ce prince, dont elle avait été si chouchée ?

③Il a été discret, disait-elle, tant qu'il a cru être malheureux ; mais une pensée d'un bonheur, même incertain, a fini sa discrétion.¹⁶ (数字, 斜体, 下線は筆者による。以下同様。)

ヌムール公への愛を夫に告白したことが宮廷の噂になっていることで夫と口論になった後の、クレヴ夫人による自省の場面である。①の文では、ヌムール公の軽率さと自分が噂の人物であることをヌムール公が知っている事実について、elle ne pouvait douter que (～を彼女は疑うことはできなかった)(下線部)という間接話法が2度繰り返される。②の文は、疑問文でありながら、三人称、半過去、大過去が使われており、自由間接話法であることは確かである。③の文は、「と彼女は考えた」という導入動詞による直接話法である。間接話法①から自由間接話法②、次に直接話法③、という移行はバイイの言う典型的な自由間接話法の使用例である(《Figures de pensée et formes linguistiques》, p.413-p.414)。直接話法に直せば Comment excuser une si grande imprudence, et qu'EST devenue l'extrême discrétion de ce prince dont J'AI été si touchée ? (これほどひどい軽はずみをどうやって許せるだろうか。それに、私があれば心動かされていたヌムール公の大変な慎み深さはどうなったのだろうか。)となり、その後の「彼は不幸だと思っていたときには慎み深かった。」という独白にごく自然に移っていく。また、自由間接話法で使われた discrétion (慎み深さ) という単語が、直接話法において, discret, discrétion と2度繰り返されることによって、クレヴ夫人がヌムール公の discrétion にどれほど強くこだわっていたかが示されるのである。

2. ①Il se mit à repasser toutes les actions de Mme de Clèves depuis qu'il en était amoureux ; ②quelle rigueur honnête et modeste elle avait toujours eue pour lui, quoiqu'elle l'aimât. ③Car, enfin, elle m'aime, disait-il; elle m'aime, je n'en saurais douter ;(p.369)

クレヴ夫人の別荘の庭に忍び込んだヌムール公がこれまでのクレヴ夫人の態度の rigueur (厳格さ) について思いをめぐらす場面である。①の文の repasser という単語によって、②の感嘆文がヌムール公の思考内容であることがわかるというデレ・サルレの見解は正しい (Delhez-Sarlet, p.78)。また、②の文の elle l'aimât という最後の語句が、③の直接話法内で2度繰り返される elle m'aime と呼応していることから、②の文章が自由間接話法によって表されたヌムール公の思考内容であることは明らかである。直接話法に直せば, quelle rigueur honnête et modeste elle A toujours eue pour MOI, quoiqu'elle M'AIME. (彼女は私を愛しているのに、彼女は私に対してなんと貞淑で慎み深い厳格さを持ち続けたことだろう) となり、「彼女は私を愛しているのだ」という直接話法の文章と重なりつつ連結する。ヌムール公がクレヴ夫人の自分への愛情を完全に把握している事実が強調される仕組みである。

(2) フランシオンが疑問を投げかけた箇所 ー地の文の一部に現れる場合

フランシオンが *contestable* (議論の余地がある) (Francillon, p.223) としている2つの例の言語的特徴は、地の文の一部の中にひっそりと組み込まれているということであり、この点が直接話法と隣接している先の2つの例と異なっている。

1. ①L'aveu que Mme de Clèves avait fait à son mari était une si grande marque de sa sincérité et elle niait si fortement de s'être confiée à personne que M. de C lèves ne savait que penser. ②D'un autre côté, *il était assuré de n'avoir rien redit ; c'était une chose que l'on ne pouvait avoir devinée, elle était sue ; ainsi il fallait que ce fut par l'un des deux,* mais ce qui lui causait une douleur violente était de savoir que ce secret était entre les mains de quelqu'un et qu'apparemment il serait bientôt divulgué.(p.350)

デレ・サルレが②の前半の斜体部分を自由間接話法だとする文法的根拠は、①の最後の *penser* (考える) という動詞によって思考の始まりが示されているという点である。また文脈から、②の斜体部分の最後、*il fallait que ce fut par l'un des deux*。(二人のうちのどちらかのはずだ) と言えるのは、クレヴ夫妻のどちらも口外していないことを知っている語り手ではなく、それをまだ知らない人物のはずで、ここではそれはクレヴ公しかいない、という点に注目している¹⁷。筆者は、②の斜体部分がクレヴ公の思考内容を示す自由間接話法であって、語り手に帰属する地の文ではないと考えるデレ・サルレの見解に賛成である。その理由は以上の2点に加えて、前後の文章との構文上の違いである。①の文は、*si ~ et si ~ que* と因果関係を明確に示した分析的な文章であり、②の後半、*mais ce qui lui causait une douleur violente ~* という文も、*ce qui ~ était de savoir que ~ et que ~* というように、*que* 以下の名詞節を2つ抱えた息の長い構造である。それに比べ、②の斜体部分は、細切れの短文が、論理的関連を示す接続詞を省いた形で次々と現れる。これは、予測外の事態に混乱したクレヴ公の内面をそのまま表す文章と考えることができる。内的な困惑のリズムを、地の文に溶け込ませる形で組み込むために、自由間接話法が使われているのではないだろうか。

また、直接話法との接触がないとは言っても、この段落の直前のおよそ2ページは、クレヴ夫妻が秘密漏洩の責任を互いに押し付けあう直接話法による激しい口論の連続である。この直接話法の応酬の余韻が、嫉妬と絶望に苦悩するクレヴ公の心に残り、②のような短い文の連続として現れているのである。直接話法に変えると、*JE SUIS assuré de n'avoir rien redit ; c'EST une chose que l'on en PEUT avoir devinée, elle EST sue ; ainsi il FAUT que ce SOIT par l'un des deux* (私は確かに他言していない。人が憶測できるようなことでもない。それなのに知られている。となると、二人のうちどちらかということになる) となり、混乱がじかに伝わる文章になる。クレヴ公の論理展開が根本的に間違っていることは語り手も読者も十分に承知しているだけに、このように考えるしかないクレヴ公の置かれた理不尽な状況が胸に迫る。

2. ①Quand elle eut fait quelque réflexion, elle pensa qu'elle s'était trompée et que c'était un effet de son imagination d'avoir cru voir M. de Nemours. ②*Elle savait qu'il était à Chambord, elle ne trouvait nulle apparence qu'il eut entrepris une chose si hasardeuse ;* ③elle eut envie plusieurs fois de rentrer dans le cabinet et d'aller voir dans le jardin s'il y avait quelqu'un. Peut-être souhaitait-elle, autant qu'elle le craignait, d'y trouver M. de Nemours ;(p.368)

デレ・サルレは、斜体部分がもし語り手の言葉であるならば、②の前半部分は *elle croyait qu'il était à Chambord*。(彼がシャンボールにいると考えていた) と書かれたはずだという (Delhez-Sarlet, p.79)。語り手はヌムール公がシャ

ンポールにいないことを知っているのであるから、elle savait (知っている) と言えるのはそのように思い込んでいるクレヴ夫人に他ならない。したがってここは、JE SAIS qu'il EST à Chambord. (彼がシャンポールにいることはわかっている) という直接話法に書き換え可能な、自由間接話法だということである。フランシオンは疑わしいと言うが、筆者は自由間接話法だというテレ・サルレの説に賛成である。さらに筆者は、②の後半部分もまた自由間接話法だと考えたい。直接話法に変換すると、JE NE TROUVE nulle apparence ~. (そんな大それたことを考えるはずはない) となり、ヌムール公の大胆な計画を承知している語り手のことばではなく、シャンポールにいてここまでくるはずがないと思いついてクレヴ夫人のことばと考えるべきである。②のカンマを挟んだ二つ文章が接続詞なしで並列されていることも、語り手による分析的な文章でないことを示唆している。

(3) 自由間接話法だと考えるべき箇所

この章の(1)(2)で検討したように、テレ・サルレが挙げた4つの例のすべてが自由間接話法である。彼女はこれだけだというが、ファーブルと同様に他の可能性を考えて小説を読んでも、自由間接話法だと考えられる箇所がさらに4つある¹⁸。

1. ①*Quel poison, pour Mme de Clèves, que le discours de Mme la Dauphine !* ②*Le moyen de ne se pas reconnaître pour cette personne dont on ne savait point le nom et le moyen de n'être pas pénétrée de reconnaissance et de tendresse, en apprenant, par une voie qui ne lui pouvait être suspecte, que ce prince, qui touchait déjà son coeur, cachait sa passion à tout le monde et négligeait pour l'amour d'elle les espérances d'une couronne ?* ③*Aussi ne peut-on représenter ce qu'elle sentit, et le trouble qui s'éleva dans son âme.*(p.291)

この章の(1)で扱った直接話法へ移行する自由間接話法の2番目の例で、作中人物のことばとしての感嘆文*quelle rigueur ~*があったが、この小説の中ではたいていの場合感嘆文は語り手のことばであり、単調さを避ける効果を持っている¹⁹。ここでも、①は語り手のことばとしての感嘆文である。③では一般人称onと現在形が使われ、これも語り手の主張だと考えられる。間に挟まれた長い修辭的な疑問文②は、①で言われたpoison(毒)がもたらした心の叫びであり、それは③の文章では、ce qu'elle sentit(彼女が感じたこと)と要約される。つまり、三人称、半過去の形をとりながらも、カンマによって不規則に途切れる②の文章は、クレヴ夫人の思考内容そのもの動きに寄り沿っているのである。語り手と作中人物の声が重なり合う、まさしく自由間接話法であると思われる。

2. *Mme de Clèves n'était pas peu embarrassée.* ①*La raison voulait qu'elle demandât son portrait ;* ②*mais, en le demandant publiquement, c'était apprendre à tout le monde les sentiments que ce prince avait pour elle, et en le lui demandant en particulier, c'était quasi l'engager à lui parler de sa passion.* ③*Enfin elle jugea qu'il valait mieux le lui laisser.*(p.302)

ここでは、①で示されるla raison(理性)が優位にある状態でのdemandât son portrait(肖像画を要求する)という選択肢から、③のle lui laisser(肖像画を盗ませておく)という正反対の結論に至るまでの、クレヴ夫人の心理的な逡巡の様子が②の文章である。ファーブルはこの部分について、内的独白が客観化されていると指摘している(Fabre, p.47-p.48)が、筆者もその考えに同意する。ヌムール公が自分の肖像画を盗むのを見逃すことができ、しかも密かに彼の味方をするのに都合の良い理屈を考えついて、正義と恋に陶然となるクレヴ夫人の声の響きを残しながら、語り手の地の文に取り込んだ文章、つまり自由間接話法であると考えられる。

3. ①elle se remit devant les yeux l'aigreur et la froideur qu'elle avait fait paraître à M. de Nemours, tant qu'elle avait cru que la lettre de Mme de Thémynes s'adressait à lui ; ②*quel calme et quelle douceur avaient succédé à cette aigreur, sitôt qu'il l'avait persuadée que cette lettre ne le regardait pas.* ③Quand elle pensait qu'elle s'était reproché comme un crime, le jour précédent, de lui avoir donné des marques de sensibilité que la seule compassion pouvait avoir fait naître et que, par son aigreur, elle lui avait fait paraître des sentiments de jalousie qui étaient des preuves certaines de passion, elle ne se reconnaissait plus elle-même.(p.329)

①によって語り手は l'aigreur et la froideur という二つの概念がクレヴ夫人の頭に浮かんだことを示す。②の文はこの2つに対する反対概念が *quel calme et quelle douceur* という感嘆文で表され、接続詞をはさんだ複文構造という点でも①と対をなしており、①と同様に語り手による地の文の一部と考えることも確かに可能である。しかし②の *quel, quelle* という書き出しは、語り手がクレヴ夫人の態度の豹変を驚きとともに伝えていると同時に、クレヴ夫人自身の驚愕をも伝えようとしているのではないだろうか。③は間接語法の複雑な形で、②の簡略さとまったく異なる調子であり、この点でも②がクレヴ夫人の内面に限りなく寄り添う形で書かれた、自由間接語法であることを示唆する。

4. ①*Quel effet produisit cette vue d'un moment dans le cœur de Mme de Clèves ! Quelle passion endormie se rallumait dans son cœur, et avec quelle violence !* ② Elle s'alla asseoir dans le même endroit d'où venait de sortir M. de Nemours; elle y demeura comme accablée. ③ Ce prince se présenta à son esprit, *aimable au-dessus de tout ce qui était au monde, l'aimant depuis longtemps avec une passion pleine de respect et de fidélité, méprisant tout pour elle, respectant jusqu'à sa douleur, songeant à la voir sans songer à en être vu, quittant la cour, dont il faisait les délices, pour aller regarder les murailles qui la renfermaient, pour venir rêver dans des lieux où il ne pouvait prétendre de la rencontrer, enfin un homme digne d'être aimé par son seul attachement, et pour qui elle avait une inclination si violente qu'elle l'aurait aimé quand il ne l'aurait pas aimée ; mais, de plus, un homme d'une qualité élevée et convenable à la siennne.* ④ *Plus de devoir, plus de vertu qui s'opposassent à ses sentiments ; tous les obstacles étaient levés, et il ne restait de leur état passé que la passion de M. de Nemours pour elle et que celle qu'elle avait pour lui.*

⑤Toutes ces idées furent nouvelles à cette princesse.(p.380)

①の2つの感嘆文は語り手が高揚感とともに状況を描いたものである。②は単純過去の2つの文章からなり、クレヴ夫人の行動を一つずつ示した文である。③の書き出しは②と同じ単純過去で、ヌムール公の姿がクレヴ夫人の頭に思い浮かんだ事実を述べている。問題になるのはそれに続く斜体部分で、下線部分8箇所は、形容詞、現在分詞、名詞と品詞が変化しながら、すべて主語 *ce prince* の補語となっている。文法的な修飾関係は非常に長いものの、一つ一つはかなり短い意味の塊であり、次々に *ce prince* のかなわぬ恋に悩む姿が増殖していく。これらはクレヴ夫人の目に映るヌムール公の姿そのものと合致している。④の文章は、③の長い思考の後でクレヴ夫人自身がたどり着いた結論である。⑤は明らかに地の文だがここで *toutes ces idées* (これらすべての考え) と要約されているのが、③と④に書かれている事柄である。つまり、③の斜体部分と④は、クレヴ夫人の思考内容を、地の文と同じ時制と人称で述べた自由間接語法なのである。

結論

『クレヴの奥方』は、主に、地の文、間接話法、直接話法、で構成されているが、自由間接話法も心理分析の重要な方法として使われていると考えられる。内面の赤裸々な吐露としての直接話法への自然な移行を導く手法、あるいは、語り手による外からの心理分析からごく自然に作中人物の内的世界への共感を促す手法、として用いられているのである。フランシヨンの言うように、『クレヴの奥方』では作中人物自身による自己分析と自己認識が不完全なままである一方 (Francillon, p.213-p.214), 語り手の分析は首尾一貫して切れ味の良さを誇っている。心理分析小説の基礎を築いたラファイエット夫人にとって、自由間接話法は、登場人物の内面の闇をそのまま残しつつ、語り手による客観的な心理分析を続けるための有効な手段だったはずである。

注

1. いかにかこの問題が大きいかは、多くの外国文学研究者がこの問題について論じていることからわかる。たとえば、鷲見洋一は、詳細にこの話法の翻訳技術を検討しており (『翻訳仏文法 (下)』, ちくま文庫, 2003 年, 156 ページ-168 ページ), 中川ゆきこは、英語の作品におけるこの問題に焦点を当て (『自由間接話法』あぼろん社, 1983 年), 牧野成一は、英語との比較言語的な視点から「共感話法」と名づけてこの問題を論じている (『ことばと空間』, 東海大学出版, 1978 年)。
2. 顧那, 「自由直接話法と自由間接話法における語り手の視点」, 『言語と文化』第 6 号, 2005 年。この中で著者は中国語よりも日本語のほうが語り手の作中人物への介入度が大きくなる, と結論付けている。自由間接話法において作者の介入度が大きくなればなるほど, 作中人物による直接話法に近づいていく日本語の特色から, 「自由直接話法」という言い方もしている。著者が中国語との比較から指摘しているように, 日本語は語り手の外的な視点の確立が困難であり, 三人称での語り保証されにくく, 作中人物の視点と同一化する傾向が強い。日本語における自由間接話法という用語と概念が, フランス語, 英語の自由間接話法と同一視されてよいかどうかという問題はさらに検討の必要がある。
3. ジェラルド・ジュネット, 『物語のディスコース』, 水声社, 1985 年, 196 ページ-217 ページ。
4. Charles Bally, «Le style indirect libre en français moderne», *Germanisch-Romanische Monatschrift*, 4, 1912.
5. Marcel Cohen, *Grammaire et style*, Édition Sociales, Paris, 1954, p.97-p.107. マルセル・コーエンは, 典型的な間接話法の例として『クレヴの奥方』の中から 2 箇所を引用し, その後に自由間接話法の検討へ移るが, その中ではこの小説を全く取り上げない。
6. 岡野輝男, 「La Fontaine の自由間接話法」, 『ガリア』7 号, 「古代フランス語の自由間接話法」, 『ガリア』8 号, 「古代フランス語における自由間接話法のいわゆる「近代的用法」について」, 『ガリア』10, 11 号。彼によれば, 口承文学が支配していた中世では, 語り手の抑揚によって言説の発話者が区別されたい。17 世紀に一人で黙読する対象としての書き言葉が成立したことが契機となって, 話法の多彩さが確立したと言える。
7. 朝倉季雄, 『フランス文法事典』, 三省堂, 1955 年, 342 ページ。
8. Charles Bally, "Figures de pensée et formes linguistiques", *Germanisch-Romanische Monatschrift*, 6, 1914, p.406.
9. この後に c にあった *ou si je retournerais sur mes pas*. が抜けているのは単純な書き落としと思われる。
10. 自由間接話法を地の文と区別するのは, 言語的指標と文脈の両方であることは, バイイも指摘している (「*Figures de pensée et formes linguistiques*」, p.457)。
11. デイヴィッド・ロッジ, 『バフチン以後』, 法政大学出版局, 1992 年, 87 ページ。
12. バイイが最初にこの用語を提唱したときには, 声の二重性や曖昧さよりも, 報告者, または語り手の客観性が維

持されるという点に焦点を置いていた。彼は、語り手はあくまでも発話者より優位にあり、発話者の視点を共有することは決してない、としている。つまり、自由間接語法は、語り手の報告者としての客観性が前提となって成立しているのである。語り手の客観性の保持という点で、日本語への翻訳は困難を伴う。日本語では語り手の客観性よりも作中人物の主観性のほうが強調されやすいためである。鷲見洋一は「自由間接語法は、よく知られるように、直接語法と間接語法の間中に位する語法であるから、そのニュアンスを訳文にとどめるには、いくら視点移入の工夫を働かせるにしても、役者が作中人物に完全になりすまして、直接語法そのままに訳してしまうのはいただきかねる」（『翻訳仏文法、下』、160ページ）とか「これはもう間接語法に間接語法に近い、きりりとまとめて括ったような表現になる。現実の談話のリズムや呼吸を、訳文に意味なく持ち込むことは慎まなければならない」（同、165ページ）などと、安易に作中人物の視点になりきることへの注意を喚起している。

13. Jean Fabre, *L'art de l'analyse dans la Princesse de Clèves*, Publications de la Fac. des Lettres de Strasbourg, Édition Ophrys, Paris, 1970 (Mélanges 1945, II, Études Littéraires, Paris, 1945), p.47.
14. Claudette Delhez-Sarlet, «Style indirect libre et point de vue», *Cahiers d'analyse textuelle*, 6, Société d'Édition «Les Belles Lettres», Paris, 1964, p.70-p.80.
15. Roger Francillon, *L'œuvre romanesque de Madame de La Fayette*, Librairie José Corti, Paris, 1973, p.221-p.223.
16. Madame de Lafayette, *Romans et Nouvelles*, Éditions Garnier Frères, Paris, 1970, p.351. 以下、本文中にページ数を示す。
17. この例のように、間接語法や直接語法との接触なしに地の文の一部に現れる自由間接語法については、バイイはラ・フォンテーヌの文章に生彩を与えている手法であり、モーパッサンを例に挙げて近代の小説ではよく見られるとしている（「Figures de pensée et formes Linguistiques」, p.416）。
18. 邦訳では、地の文でありながら自由間接語法として作中人物の直接語法に近い形で訳されている箇所がたくさんある。これは、日本語の文法体系が、作中人物の視点を少しでも取り入れようとする、その人物の一人称による現在形が採用されることになるからである。日本語には、自由間接語法の半分の価値であり、バイイが大前提とした語り手の視点が維持されにくい、という特徴がある（牧野成一、『ことばと空間』、東海大学出版会、1978年）。
19. 典型的な例を挙げておく。(1) Elle voyait seulement que M. de Nemours ne l'aimait pas comme elle l'avait pensé et qu'il en aimait d'autres qu'il trompait comme elle. Quelle vue et quelle connaissance pour une personne de son humeur, qui avait une passion violente, qui venait d'en donner des marques à un homme qu'elle en jugeait indigne et à un autre qu'elle maltraitait pour l'amour de lui ! (...) Il lui semblait que ~ et que ~. (...) Elle voyait par cette lettre que ~. (...) Enfin elle pensait tout ce qui pouvait augmenter son affliction et son désespoir. Quels retours ne fit-elle point sur elle-même ! quelles réflexions sur les conseils que sa mère lui avait donnés ! (...) Enfin elle trouva que ~.(p.310)
- (2) mais, voyant qu'elle demeurait dans le cabinet, il prit sa résolution d'y entrer. Quand il voulut l'exécuter, quel trouble n'eut-il point ! Quelle crainte de lui déplaire ! Quelle peur de faire changer ce visage où il y avait tant de douceur et de le voir devenir plein de sévérité et de colère !

Il trouva qu'il y avait eu de la folie, non pas à venir voir Mme de Clèves sans [en] être vu, mais à penser de s'en faire voir ;(p.367) この2つの例で特徴的なのは、間接的な報告文、たとえば voyer, trouver の後に接続詞 que で思考内容を表す文章の羅列の途中で、感嘆文を挿入することで、間接語法の連続によって生まれる単調さを回避していることである。